The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	がんサバイバーにおける補完療法のQOLへの影響
Author(s)	井上, 佳代
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/87714
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　井上　佳代　）	
論文題名	がんサバイバーにおける補完療法のQOLへの影響

論文内容の要旨

【背景】我が国のがん罹患率は依然として高く、治療成績の向上によりがんと共に生きるがんサバイバーは増加している。がんサバイバーは、治療後も再発や身体症状などによるストレスを抱え、不安や抑うつの有病率も高く、がんに罹患していない人に比べてQOLが低いと言われている。また、日本においてがんと診断されて初期治療を終了したがんサバイバーは、看護師と接する機会が少なく看護ケアが不十分であると言われている。この状況においてサバイバー自身で行える精神面へのセルフマネジメントとして補完療法（Complementary Therapy ;CT）の有用性が言われているが、QOLへの影響を検証した報告は少ない。

【目的】本研究は、初期治療が終了したがんサバイバーにおけるCTのQOLへの影響を検証することを目的とした。

【方法】がんと診断され、初期治療が終了している18歳以上のがんサバイバーを対象に、介入群69名、対照群59名に単施設で準実験研究を行った。介入群には3種類（音楽療法・漸進的筋弛緩法・呼吸法）のうち好みのCTを1日1回（20分）以上自宅で8週間行ってもらった。基本属性は年齢、性別、治療歴、再発の有無などを聴取し、介入前（T0）、介入開始から4週間後（T4）、8週間後（T8）にQOLの評価を行った。QOLの評価はShort Form-8（SF-8）質問票を用い、介入群と対照群の下位尺度（身体機能・日常役割機能；身体/精神・体の痛み・全体的健康感・活力・社会生活機能・心の健康）、精神的サマリースコア、身体的サマリースコアの値と、4週間後の変化（T4-T0）と8週間後の変化（T8-T0）をMann-Whitney U testを用いて分析した。

【結果】介入群（51.0±10.2歳）と対照群（55.4±11.5歳）の年齢には有意差（p=.024）がみられた。T0、T4、T8すべての点で両群ともSF-8のスコアは国民基準（50.44～53.53）より低い傾向で、群間における有意差はなかったが、T4-T0のSF-8の下位尺度である「社会生活機能」（p=.043）・「心の健康」（p=.016）、精神的サマリースコア（p=.033）に有意差があり、介入群が対照群よりもQOLが低いことが示された。一方、介入群は、T4-T0に比べてT8-T0では精神的サマリースコアに有意差はなかったが、精神面のQOLが改善傾向であった。

【考察】8週間ではQOLの効果を検証することが出来なかった。しかし、精神面のQOLについては、4週間後は介入群が有意に低い状態であったが、8週間後では改善傾向にあった。CTを長期に生活に組み入れることで、徐々に効果が表れる可能性がある。CTを習慣化しQOLを高めるためには8週間より長期の継続が必要と考えられた。介入群でCTの開始後4週間で精神的QOLが低くなったことは、「身体的・精神的問題の発生」「何らかの要因で社会生活が影響を受けた」「慣れないCTの実践」が要因となっているのではないかと推察された。また、両群の年齢の差異などの影響も考えられ、さらなる研究が必要である。看護師と接する機会が少ない状況において、がんサバイバーがCTを用いてQOLを向上させていくには、CTを継続して習慣化していけるように、身体的・精神的問題への介入を含め、CTの継続を促すITを用いた介入等の看護支援の必要性が示唆された。

【結論】 本研究において、CTはがんサバイバーのQOLに効果を示さなかったが、CTを習慣化し、より長期的に実践していくことで精神面のQOLの効果が得られる可能性を明らかにすることができた。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　井上　佳代　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教 授	荒 尾 晴 惠
	副 査　教 授	清 水 安 子
	副 査　教 授	上 野 高 義

論文審査の結果の要旨

我が国のがん罹患率は依然として高く、治療成績の向上によりがんと共に生きるがんサバイバーは増加している。がんサバイバーは、治療後も再発や身体症状などによるストレスを抱え、不安や抑うつの有病率も高く、がんに罹患していない人に比べてQOLが低いと言われている。また、我が国では、がんと診断されて初期治療を終了したがんサバイバーは、看護師と接する機会が少なく看護ケアが不十分であると言われている。この状況においてサバイバー自身で行えるストレス対処のセルフマネジメントとして補完療法（Complementary Therapy ;CT）の有用性が言われているが、QOLへの影響を検証した報告は少ない。そこで本研究では、初期治療が終了したがんサバイバーにおけるCTのQOLへの影響を検証することを目的とした。方法は、単施設でがんと診断され、初期治療が終了している18歳以上のがんサバイバーを対象に、介入群69名、対照群59名に準実験研究を行った。介入群には3種類（音楽療法・漸進的筋弛緩法・呼吸法）のうち好みのCTを1日1回（約20分）以上自宅で8週間行ってもらった。基本属性は年齢、性別、治療歴、再発の有無などを聴取し、介入前（T0）、介入開始から4週間後（T4）、8週間後（T8）にQOLの評価を行った。QOLの評価はShort Form-8（SF-8）質問票を用い、介入群と対照群の下位尺度（身体機能・日常役割機能；身体/精神・体の痛み・全体的健康感・活力・社会生活機能・心の健康）、精神的サマリースコア、身体的サマリースコアの値と、4週間後の変化（T4-T0）と8週間後の変化（T8-T0）をMann-Whitney U-testを用いて分析した。結果は、介入群（51.0±10.2歳）と対照群（55.4±11.5歳）の年齢には有意差（p=.024）がみられた。T0、T4、T8すべての点で両群ともSF-8のスコアは国民基準（50.44～53.53）より低い傾向で、群間における有意差はなかったが、T4-T0のSF-8の下位尺度である「社会生活機能」（p=.043）・「心の健康」（p=.016）、精神的サマリースコア（p=.033）に有意差があり、介入群が対照群よりもQOLが低いことが示された。一方、介入群は、T4-T0に比べてT8-T0では精神的サマリースコアに有意差はなかったが、精神面のQOLが改善傾向であった。結果より、8週間ではQOLの効果を検証することが出来なかった。しかし、精神面のQOLについては、4週間後は介入群が有意に低い状態であったが、8週間後では改善傾向にあった。CTを長期に生活に組み入れることで、徐々に効果が表れる可能性がある。CTを習慣化しQOLを高めるためには8週間より長期の継続が必要と考えられた。介入群でCTの開始後4週間で精神的QOLが低くなったことは、「身体的・精神的問題の発生」「社会生活の影響」「慣れないCTの実践」が要因ではないかと推察された。また、両群の年齢の差異などの影響も考えられた。QOL向上に結び付く、CTの内容の検討や開発の必要性も示唆され、さらなる研究の蓄積が必要である。看護師と接する機会が少ない状況において、がんサバイバーがCTを用いてQOLを向上させていくには、CTを継続して習慣化していけるように、身体的・精神的問題への介入を含め、CTの継続を促すITを用いた介入等の看護支援の必要性が示唆された。本研究において、CTはがんサバイバーのQOLに効果を示さなかったが、CTを習慣化し、より長期的に実践していくことで精神面のQOLの効果が得られる可能性を明らかにすることができた。以上から、本論文は博士（看護学）の学位授与に値するものである。